

2009年4月25日勉強会

プラトン『ソクラテスの弁明』『クリトン』

発表者：中山

参加者：嶋田（研）・岩瀬・安達・吉富・十河（晃）

古川・中山・十河（祐）・嶋田（紫）・久富

記録者：久富

『ソクラテスの弁明』より

○ “鬼神”とは・・・

カルト邪教の類ではなく、一人ひとりの背後にいる守護例のようなものでは。キリスト教とは違う、ギリシア神話の神々が下敷きになっているのでは。ソクラテスの言う神とは、神というよりはソクラテスの信念のようなものではないかという意見が出た。

○ “無知の知”について・・・

「無知の知」はある意味開き直りではないかという意見が出た。知らないことを知ろうとすることが大切なのに、無知の知（自分は何も知らない）で終わらせるのは開き直りでは・・・？

この意見に対し、「自分はある程度知っている」と無条件に信じていることを疑うこと（洗いなおす）ことはすごいこと。そこには謙虚さとストイックさしかない。ただ知らないのだと開き直ることとはまた違うのではないかという意見も。

では、ソクラテスはどうやって論破していったのだろう。自分より賢い人間を探すうちに、途中から人々が無知であることを証明していつている。ソクラテスの姿勢は、人々に真の知を授けている。一種の啓蒙活動になっているのではという意見が出た。

○ 現代人ならどうか・・・

問題提起：この時代は目に見えないものを信じていたが、仮に科学技術が発達した現代ではどうだろうか。現代人ならそのドクサ（憶見）から逃れられているのだろうか。

⇒まったく逃れられているとは言えない。さまざまな情報があるが、出版物やメディア、教科書などを無条件に信じてしまっている。

⇒アメリカに行ったことがないから知らないというわけではなく、ずっと住んでいるから知っているつもりでいる日本についても実は知らない。

⇒ものごとに対して、“そういうものなのだ”と思いつ込むことによって、憶見が始まっているのでは。

○ “死”について・・・

ソクラテスの言う「死」について、ソクラテスは「死」は誰にもわからないと言っている

のに、なぜ「住居を移すだけ」だと決めているのかという疑問が出た。
ソクラテスは時代に対する問題意識を持っていたのだろうか。

○ p72・17「徳その他の・・・」以降について
ソクラテスの考え方について。

正しいものが何であるかはわからないけど、「正しいものがある」と仮定して議論することによって、何かに近づいていける。希望は捨てていない。さらに、自分が間違っているという姿勢も持っている。

⇒これは、現代にも十分に通じるものでは・・・

『クリトン』より

○ 正しきの平等は存在しない・・・この根拠は何か
国に拠って生きている以上、国法には従うべきということではという意見が出た。

○ ソクラテスは何故死んだのだろうか・・・？

ここではおのおのが自由に感想を述べた。以下、参加者の意見・感想を挙げる。

- ・ ソクラテスの生き方、考え方を見て、その潔さが武士道的だという印象を持った。
- ・ 自分自身の生き方に何か原理原則のようなものが通っているのでは。ソクラテスの死は広い意味での自殺と言えるのではないか。闇米を食べなければ生きていけないのに、裁く側の自分が法を破るわけにはいかないという信念の前では死をも恐れない山口良忠判事を思い出した。
- ・ 道徳か死か。学校で道徳教育をするならそこまでつきつめるべきでは。
- ・ 誰もがソクラテスになれるわけではない。何を道徳教育とするかも問題となるのでは。道徳を教えるには文化を教えることが大事なのでは。
- ・ 自分が死ぬかもしれない状況は、最も利と反したとき。そのような極限の状況で選べるかどうか。
- ・ 感情か理性か。本音と建前。人間には理性を優先すべきときがある。親の介護を例にとって言えば、汚いと思っけていてもできるのは親への愛情があるからでは。理性のさらに上に愛情があるのでは。では、ソクラテスの場合は「知」への愛？
- ・ 今まで自分がしてきたことを投げ出さない。行為と自論を結びつけることで、説得力を持たせたのでは。
- ・ 光俱樂部事件のような・・・三島由紀夫『青の時代』
自らの原理原則に従うという点で、三島とソクラテスは似通っているのでは。ただ生きるのではなくよく生きる。自分の行動で自分の美学を証明したのでは。
- ・ この場合の「よく」＝「美しい」＝「正しい」？

厳密には違うが、「よい」行動が「美しく」、「正しく」なることはある。たとえば、ゴミを拾っている姿は美しい。逆に、美しいがよくない、正しくないものもある。芥川の地獄変などがその例となるのでは。

○ ソクラテスの行動について・・・

- キザに思える。結果に理由をつけているような感もある。しかしまさに自論を体現している。簡潔で美しくもある。
- 「死刑」と決まってからひねくれているように思える。「クリトン」の潔さとはギャップを感じた。
- それは、ソクラテスが自分が正しいと信じているからこそ言えることでは。皮肉によって真実を焙り出すことがあるのでは。
- 家族や残していくものに対する未練は全くないのだろうか。あまりにも理性的すぎる。葛藤などが見たいと思った。
- 家族への愛情なども超えて自分を律して人のためにすることはすごいと思った。ソクラテスのように生きていきたい。
- クリトンの論が正しいとソクラテスに思わせることができているならば、説得に成功したのではないか・・・。でもソクラテスは正しいものを複数認めないのでは。
- クリトンはソクラテスの生き方を納得したのでは。
- 多勢よりも一人の正不正の道理がわかっている人にだけ理解してもらえればよいという考えは現代にも通じるのでは。。。